

行政書士事務所の経営のヒント(痒い所に手が届く)

鹿行支部 鈴木 昌美

私は、妻の背中中の痒いところが、ピンポイントで、正確に判る技術を身につけています。

と言ったら、皆さんは俄には信じ難いでしょう。

人体の構造は基本的には同じ様に造られていると思っておりますが、実際にはひとりひとり、よくもここまで精巧に造られたかと思う程、緻密に造られており、現代の科学の粋を集めても、いまだに解明されておられません。

人体の構造のなかでも、外傷や変形については、レントゲンやCT、MRIなどの最新医療器具によって、かなり高性能の診断が可能になってきたようですが、痛いところや痒いところは、本人でないと判らないと聞いています。

実際に、他の人の痒いところが何も聞かないで判る筈がありません。ところが、**相手の痒いところが正確に、手に取るように判るのです。**

今までに、この話をほとんどの人が、信用していいのか、何を言っているのか、判らないような不思議な顔をしていました。

それはそうだと思います。

普段なにげなく、背中を痒いてあげていても、相手のことばに従って痒いてるだけなので、相手の希望通りの場所へ、正確に行くことはとても困難です。もっと左、右、そこそこ……。

どなたでも、一度や二度は経験がある筈です。

別に恥じることはありません。

私が気が付いたことは、人間同士の良好な関係を維持継続していく上で、経済的な負担もなく、肉体的な制約もなく、道具や器具も不要で、知識や経験もなく、どこでも、いつでも、気軽に手軽に、正確に実行できる、人間関係の絆を修復する名案だと思っています。

前置きが長くなりましたが、種を明かせばコロンブスのタマゴと同じように、なんだそんなことかと思うような、ちっとも難しい話ではありません。

まず、痒い人に背中を向けて貰い、左手の平を痒く側の人に向けて開いて貰います。そうして、右手の指で、自分の背中に見立てた左手の部分を指さして貰います。後ろの人は、その指の部分を見ながら背中中の部所を正確に痒くだけです。

至極簡単です。誰にでも出来るし、練習する必要は一切ありません。相手の痒いところを相手に聞く訳ですから、**絶対に間違う筈がありません。**

言えば簡単なことですが、この考えに辿り着く迄に七十三才になってしまいました。

この考え方を、背中を痒くことだけにとらわれなくて、これを自分の商売に応用しようと考えましたが、いかがでしょうか。

そうです。行政書士の事務所を営んでみて気が付いたことは、相手の気持ちが判ることが先決で、若しも事前に判ることが出来れば、どのように対応したら良いかが判るかも知れない。対応が良ければ、気分も良くなって貰えるかも知れない。気分が良くなれば、仕事の流れも順調にゆくかも知れない……。

要は、相手の痒いところに手が届くような、対応が出来るようになることが重要で、大切ではないかと考えてみました。

考え方はどんどん放射状に広がって際限なくなりますが、物事は具体的に判らなければ、具体的な対応が難しいということです。

それには、背中を痒く時の左手のように、何か道具を作り出すか、独自の工夫が必要だと考えてみました。

何にでも当てはまるような気がしています。

これが発明されれば、画期的な発見につながり、栄光はあなたのものだと思っています。

行政書士の仕事を依頼された時の、相談内容を纏める上で、力強い味方になること請け合いです。

相手が何を言いたいのか、何をどうして貰いたいのか、を正確に知り、理解する上で、受託後の対応が組立てられるとしたら、こんなに心強いことはありません。

行政書士はどんな仕事をしているのですか？

と良く尋ねられますが、痒いところに手が届くように考えて、努力しています、と答えられるようになりたいと思っています。

行政書士事務所の発展を心からお祈り申し上げます。

